

藤崎遺跡 18

- 藤崎遺跡第36次調査報告 -

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1052集

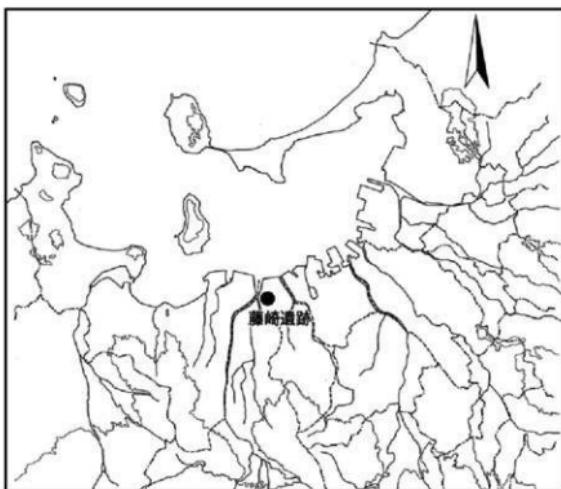
2009

福岡市教育委員会

藤崎遺跡 18

- 藤崎遺跡第36次調査報告 -

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1052集



遺跡略号 FUA-36

調査番号 0743

2009

福岡市教育委員会

序

福岡市は玄界灘に面し、古代より大陸・半島との交流が絶え間なく行われてきました。福岡市域の海浜部には博多を中心とする大規模な中世遺跡が多数みられます。近年の著しい都市化による開発により失われるこれらの文化財を後世に伝えるのは、本市教育委員会にとっての重要な責務であります。

本書は、集合住宅建築に伴い調査を実施した藤崎遺跡第36次調査について報告するものです。今回の調査では古墳時代の竪穴住居・中世の溝などを検出するとともに、多数の陶磁器・土器・石器が出土しました。これらは西新・藤崎周辺の歴史を解明する上で重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の一資料として活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、西山澄江様をはじめとする関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまで深いご理解と多くのご協力を賜りました。心から謝意を表します。

平成21年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

例　言

1. 本書は福岡市教育委員会が自宅兼集合住宅建築に伴い、福岡市早良区藤崎1-3-37において実施した藤崎遺跡第36次調査の報告書である。なお調査・整理費には規定に従い一部国庫補助金を充当した。
2. 本書に掲載した遺構実測図は阿部泰之が作成した。
3. 本書に掲載した遺物実測図は阿部・大庭友子が作成した。
4. 本書に掲載した挿図の製図は阿部がおこなった。
5. 本書に掲載した写真は阿部が撮影した。
6. 本書で用いた方位はすべて磁北で、真北より $6^{\circ} 30'$ 西偏する。
7. 遺構の呼称は竪穴住居をSC、溝をSD、土壤をSK、ピットをSP、炉跡をSRと略称する。遺構番号は発掘調査の際、現場で任意に振った通し番号を原則そのまま用いている。
8. 本書に関する記録・遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。
9. 本書の執筆・編集は阿部が行った。
10. 本書掲載の埋蔵文化財包蔵地の範囲は平成6年3月現在の推定線で、現在は変更されている可能性がある。詳細は福岡市教育委員会埋蔵文化財第1課に確認されたい。
11. 本書で報告する調査の細目は以下の通りである。

調査番号	遺跡略号	調査面積	調査期間
0743	FUA-36	187m ²	2007.10.1~2007.10.29

本文目次

はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査組織	1
第1章 位置と環境	3
第2章 調査の記録	5
1. 調査概要	5
2. 遺構と遺物	5
3. 小結	14

挿図目次

Fig. 1 調査区全体図 (1/100)	2
Fig. 2 藤崎遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/25,000)	3
Fig. 3 調査区位置図 (1/1,000)	4
Fig. 4 調査区南壁・東壁土層断面実測図 (1/80)	5
Fig. 5 SC01実測図 (1/30)	6
Fig. 6 SC01出土遺物実測図 (1/3)	7
Fig. 7 SC29実測図 (1/60)	8
Fig. 8 SC29出土遺物実測図 (1/3)	8
Fig. 9 SD02・04・28実測図 (1/100)	9
Fig. 10 SD02・04・28土層断面実測図 (1/30)	10
Fig. 11 SD02・04・28出土遺物実測図 (1/3)	10
Fig. 12 SK37実測図 (1/30)	11
Fig. 13 SR24実測図 (1/20)	11
Fig. 14 SK37出土遺物実測図 (1/3)	11
Fig. 15 ピット出土遺物実測図 (1/3)	12
Fig. 16 遺構面掘り下げ時出土遺物実測図 (1/3)	12
Fig. 17 遺構検出面出土およびその他の遺物実測図 (1/3)	13
Fig. 18 鉄製品実測図 (1/3)	14

図版目次

PL. 1	1. 調査区西半北側 (東より) 2. 調査区西半南側 (東より) 3. 調査区西半掘り下げ後状況 (東より)	PL. 4	1. SC29 (北より) 2. SD02A-A' 土層 (南より) 3. SD04C-C' 土層 (西より) 4. SD28G-G' 土層 (南より) 5. SK37 (東より) 6. SR24 (南より)
PL. 2	1. 調査区東半 (北より) 2. 調査区東半掘り下げ後状況 (南より) 3. 調査区東壁土層 (西より)		
PL. 3	1. SC01 (東より) 2. SC01竈土層 (東より) 3. SC01竈内遺物出土状況 (南より)		

はじめに

1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会埋蔵文化財第1課（以下、埋文1課）は、早良区藤崎1-3-37における自宅兼賃貸マンション建築に伴う埋蔵文化財事前審査願の提出を、2005（平成17）年6月24日付で受けた。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である藤崎遺跡に含まれていることから、当該地で平成17年8月4日に確認調査を実施し、その結果、焼土面・ピット・土壤などの遺構を検出した。この成果を元に両者で遺跡保全の協議を行ったところ、建築工事によって遺構の破壊を免れないため、建物建設予定部分について本調査を実施することで合意した。その後委託契約を締結し、平成19年10月1日から発掘調査、翌平成20年度に資料整理・調査報告書作成を行うこととした。

なお、全調査期間を通じて西山建設株式会社並びに西山澄江様、そして周辺住民の皆様方には様々な便宜を賜り、調査は大きな事故等もなく概ね順調に完了しました。紙上ではありますがここに記して深く感謝申し上げます。

2. 調査組織

調査委託：西山澄江

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第2課

調査総括：埋蔵文化財第2課 課長 力武卓治（前任）田中壽夫（現任）

同課調査第1係長 杉山富雄

調査庶務：文化財管理課 井上幸江

事前審査：埋蔵文化財第1課事前審査係長 吉留秀敏

同係主任文化財主事 宮井善朗

同係文化財主事 藏富士寛

調査担当：埋蔵文化財第2課調査第1係 阿部泰之

調査作業：西口キミ子 井上正通 浅井伸一 永井ゆり子 中村宏 榎田信一 神原堅 田原忠昭

菅野武 栗木昭孝 田口恵子 津田照子

整理作業：窪田慧 薫早苗

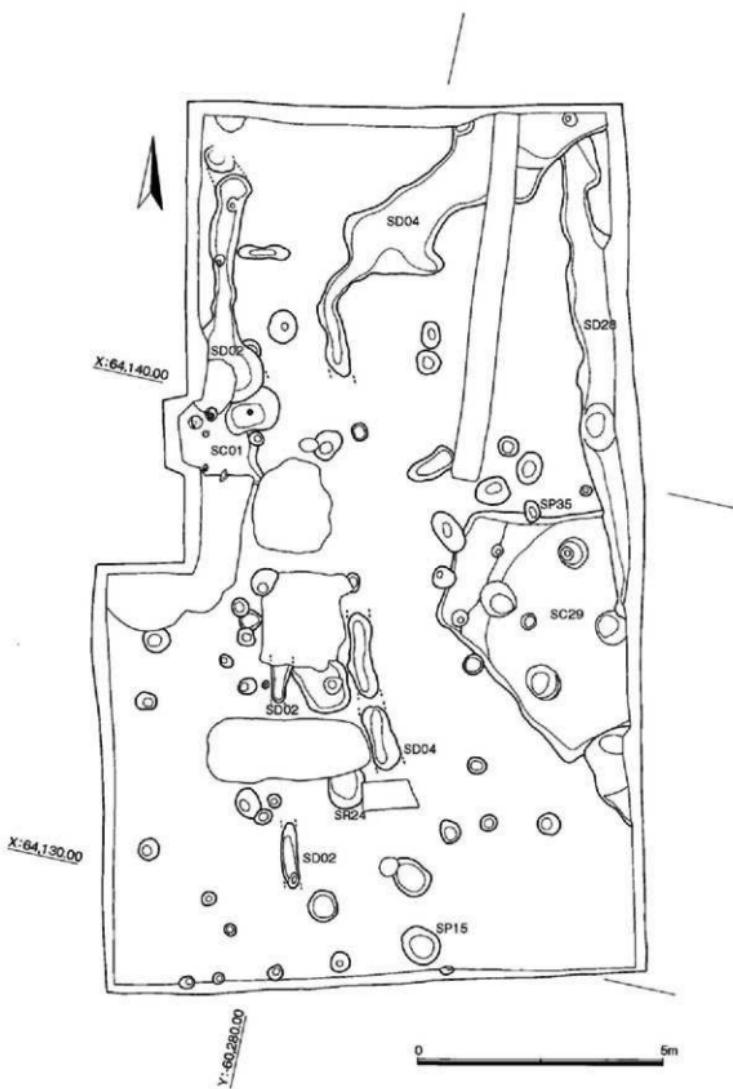


Fig. 1 調査区全体図 (1/100)

第1章 位置と環境

現在の行政区では福岡市早良区に当たる早良平野は、背振山系から西方に派生する西山・飯盛山・叶岳に南から西を限られ、東は油山から北に派生する低丘陵に囲まれる平野である。この平野は主に室見川とその支流によって開拓された沖積平野で、現在は北部から幹線道路沿いに市街地化が進んでいるが、旧来広大な水田地帯であった。この沖積平野の北部には博多湾にみられる左転海流によって形成された長大な海成砂丘が伸びている。藤崎遺跡はこの砂丘上に形成された遺跡である。

この藤崎遺跡は、弥生時代から近世にわたる遺構が検出される複合遺跡である。遺物はさらに時期を遡るものが出土しているが、当該期の遺構は検出されていない。弥生時代には、主に遺跡の北部、現国道202号線沿線において大規模な甕棺墓群が営まれる。いずれも前期末～中期に至るもので、後期に至る甕棺が出土する西新町遺跡とは様相を異にする。

古墳時代には、甕棺墓群が営まれた地域に方形周溝墓群がつくられる。古墳時代後期には堅穴住居・掘立柱建物がつくられ、一定規模の集落が形成されるものと思われる。

古代には第3次調査で土器溜まりが検出されている。各調査区で当該期の遺物は一定数量出土しているが、顕著な遺構は検出されていない。

中世以降で目立つのは多くの溝状遺構で、13世紀頃のものとされる東西方向の大規模な溝と、12世紀後半～13世紀とされる小規模な溝の2種類がある。前者には防護的機能を考え、元寇に関係する防衛施設の可能性が指摘され、後者は井戸・土壤・掘立柱建物との関係を重視し、屋敷地の区画溝としての機能が想定されている。

(本図に示す埋蔵文化財包蔵地の範囲は平成6年3月現在の推定線で、現在は変更されている可能性があります。詳細は福岡市教育委員会埋蔵文化財第1課に確認してください。)



Fig. 2 藤崎遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/25,000)

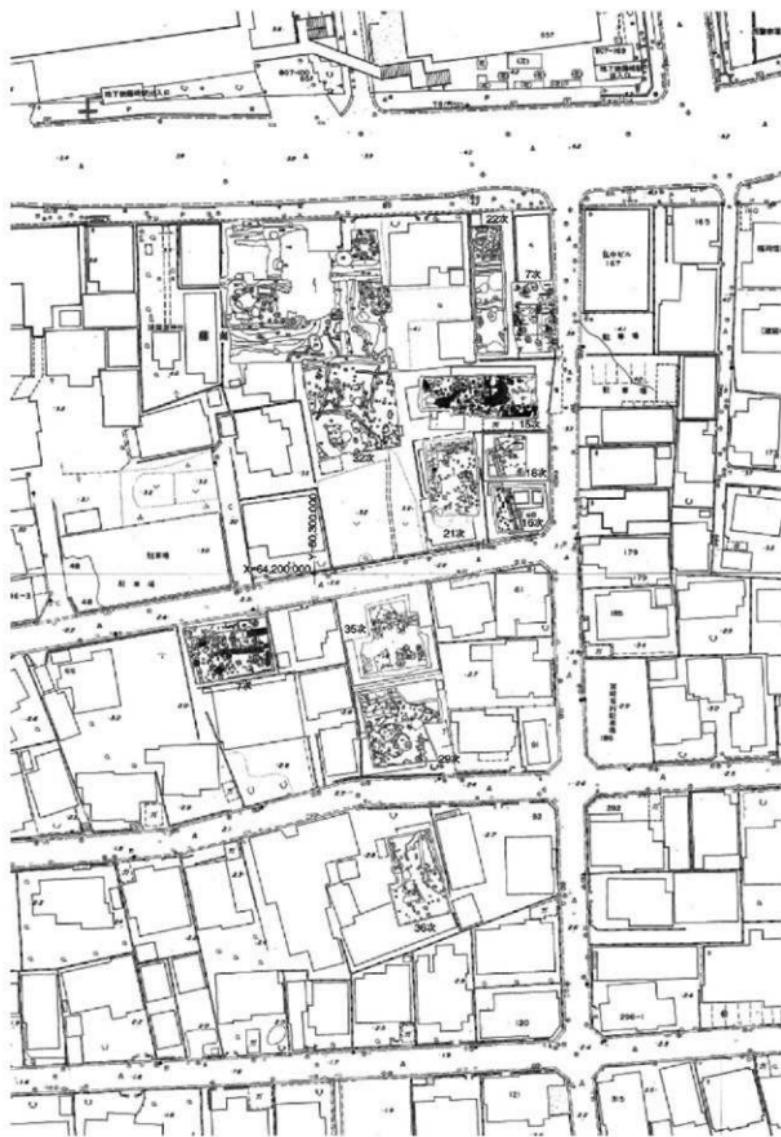


Fig. 3 調査区位置図 (1/1,000)

第2章 調査の記録

1. 調查概要

藤崎遺跡は早良平野の沿岸部に位置する周知の埋蔵文化財包蔵地である。今回報告する第36次調査地は藤崎遺跡推定範囲の南西端部、砂丘の後背部分に当たる。遺構面は現地表面から-60cm、暗黄褐色細砂層上で設定した。この層は地山である明黄褐色細砂層と上層の暗褐色砂層の漸移層で、調査終了後遺構面を地山まで掘り下げて残存遺構の有無を確認した。

おもな検出遺構は古墳時代または古代の竪穴住居2軒・炉跡1基、鎌倉期の溝3条・土壙1基である。遺物は住居址から土師器・須恵器・タコツボなど、溝から土師器皿・白磁碗など、土壙から龍泉窯系青磁碗・土師器皿などがコンテナケース5箱程度出土した。

今回の調査では、古墳時代または古代の竪穴住居2軒などの遺構を検出した。地山の細砂層は削平を受けており、遺構の深さは20~30cmと浅く残りは悪かった。北に隣接する29次調査では古墳時代後期頃とみられる竪穴住居・掘立柱建物が検出されており、これらの結果から調査地周辺に当該期の集落が広がっていたことが推測される。溝と土壙は出土遺物から12世紀後半~13世紀頃の所産とみられる。溝のほうが時期は古く、周辺の調査で検出されたものと同様、区画溝の一部と推測される。

2. 遺構と遺物

① 穹穴住居 (SC)

SC01 (Fig. 5)
調査区北西部にて検出した。溝SD02と擾乱に切られる上大半が調査区外となるため全容は不明だが、方形の住居址となる。周壁は20cm残存し、周構は検出されなかつた。埋土は暗褐色砂で堅くしまつてゐる。貼床を構築している可能性を考え精査したが、検出できなかつた。底面からは土師器・土師質須恵器甕・壺などが出土した。甕は口縁部を欠損しており、後世に調査地周辺が削平されたことを示してゐる。主柱穴は調査区内では検出されなかつたが、おそらく住居址のプランに合わせた4本柱のタイプとなろう。

竈は住居東壁に設けられている。全体の1/2程度を東壁よりも東に突出させており、全体の平面形は長軸を東西方向に有する略楕円形を呈し、場方の深さは20cmを測る。土層断面

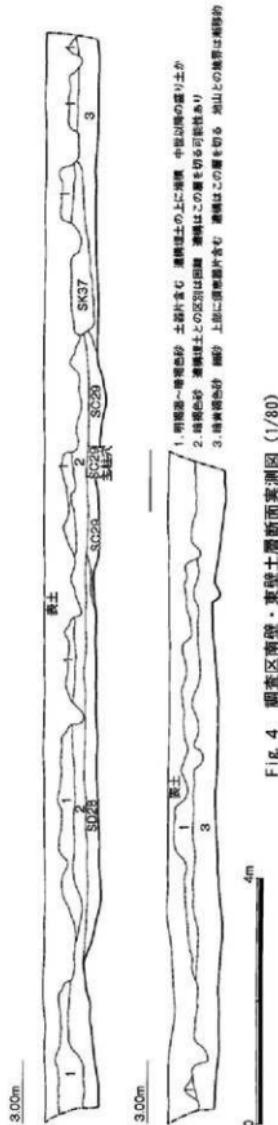


图 4.4 调查区南部·东壁土层断面实测图 (1/80)

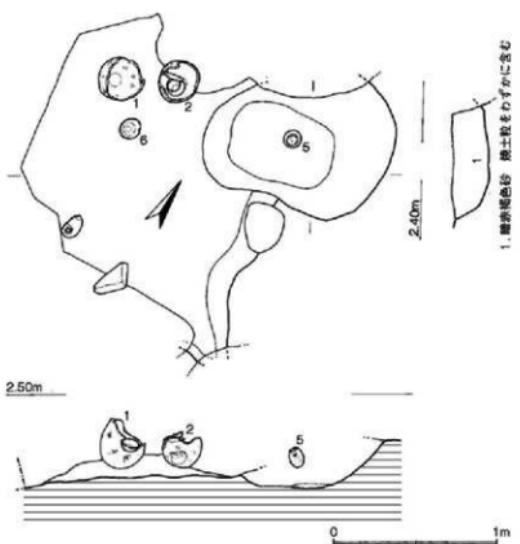


Fig. 5 SC01実測図 (1/30)

存高32.3cmを測る。胸部の両面に平行叩きが観察され、一部直交し格子目状に見える。外面には被熱し赤化する部分もあり、煮炊きに用いていたと推測される。3は土錘である。焼成は土師質で、端部を一部欠く以外ほぼ完形を呈する。器長8.8cm・胸部径2.4cmを測る。器表は磨滅し調整は不明瞭である。4・5はタコツボ形の土師器である。4は1/2個体残存する破片で、口径5.6cm・器高10cmに復元される。手捏ねで形成され、上部に孔を有する。焼成前に外面下方から穿孔される。5は竈内から出土したもので、被熱のため器壁が一部剥落するもののほぼ完形の個体である。これも手捏ねで形成され、口径5.5cm・器高11.9cmを測る。口縁部下に1箇所孔を有し、焼成前に外面下方から穿孔される。6は土師器壺である。ほぼ完形の個体で口径12.7cm・器高4.9cmを測る。内底面にはユビオサエの痕跡が残り、外底面は不定方向のヘラ削りが施される。7は土師器鉢である。器高9.7cmと小型で、器壁は被熱のため全面にわたって剥落している。口縁部は1/3程度の残存だが口径11.6cmに復元される。底面は中央部が突出し据わりが悪いが平底に近く、外来系の要素がみられる。内面は右上がりのヘラケズリが施され、底面はナデである。口縁部内面は炭化物の付着によるとみられる黒色を呈する。8・9は須恵器である。8は蓋である。口縁部の小片で、口径12.2cmに復元される。口縁部は内面に向け肥厚し外面に段は認められない。9は壺身である。口縁部から体部にかけての小片で、口径15.2cmに復元される。かえりは低く内傾し、受け部には沈線が1条観察される。上記何れの個体も胎土は精良で、焼成は良好である。

SC29 (Fig. 7)

調査区東部で検出した。SD28・SK37に切られる。北辺がいびつだが方形の住居址である。主柱穴は4本である。この柱穴は住居址北西側の3基の柱穴と組み合わさせて掘立柱建物となる可能性が考え

図をFig. 5に示す。埋土は被熟した砂である暗赤褐色砂で、粒状の焼土を少量含んでいる。粘土は検出されなかった。竈の中央付近からタコツボ形の土師器が1点出土している。

出土遺物 (Fig. 6)

1は土師器壺である。口縁部を欠損するが、2/3個体残存するものである。胸部径25.3cm・残存高27.3cmを測る。内面は右上がりのヘラ削り、底面は方向が異なる。外面はタテハケだが被熱のため器壁が剥落し調整は上部にのみ残存する。2は須恵器壺。焼成は土師質でいわゆる似非須恵器と呼ばれるものである。この個体も口縁部を欠損するが、意図的に打ち欠いている可能性もある。胸部径27.6cm・残

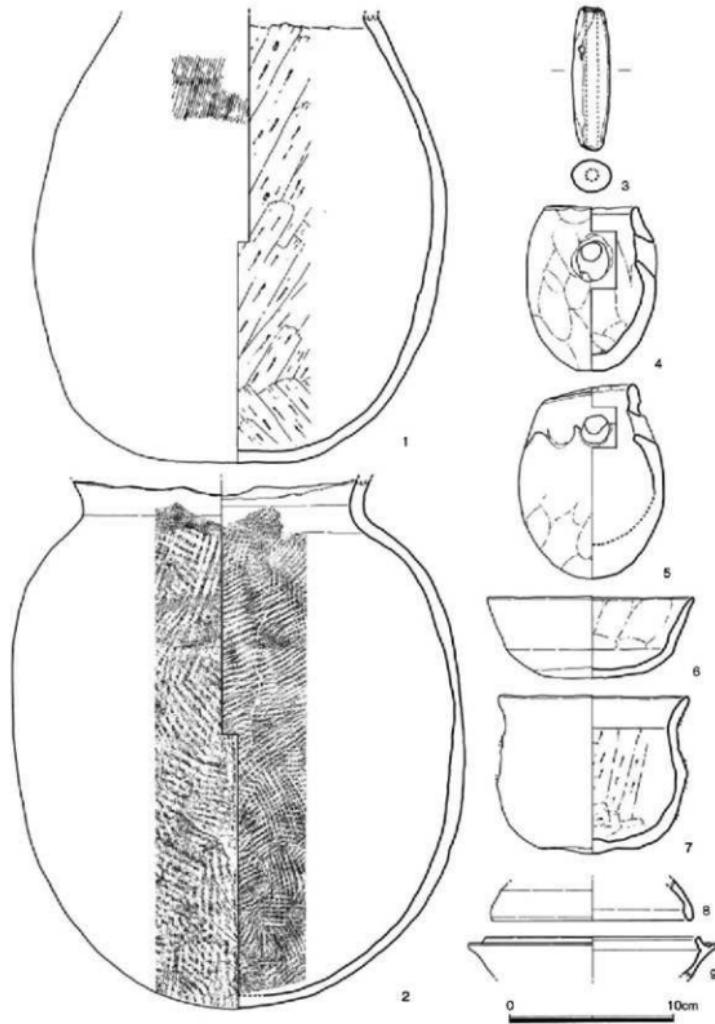


Fig. 6 SC01出土遺物実測図 (1/3)

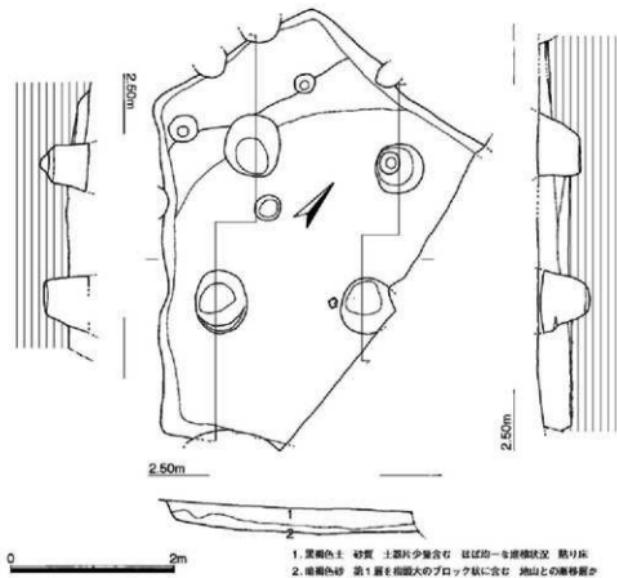


Fig. 7 SC29実測図 (1/60)

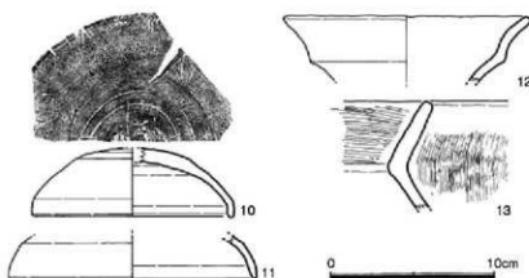


Fig. 8 SC29出土遺物実測図 (1/3)

られたが、この4基のみ埋土が堅く縮まった明黄褐色砂で北西側の3基（埋土は暗褐色砂）と明らかに異なることから現場ではこれら4基を住居址の柱穴と判断した。何れの柱穴からも柱痕跡は検出されなかった。遺構検出時に柱穴を検出し得たことからSC29はまず住居址の堀方を掘削し、ある程度埋めて床面を構築した後柱穴を掘削、柱を据えたものと推測される。したがってこの住居址は床面まで削平されているとみられる。周壁は深さ30cm程度残存し、北西側の歪な部分は1段浅くなりテラス状を呈する。埋土は黒褐色砂である。壁溝・竈は検出されなかった。竈はSC01では東側に構築されており、調査区外に存在する可能性もあるが、現場では確認できなかった。

出土遺物 (Fig. 8)

10・11は須恵器蓋である。10は1/3個体残存する破片で、口径12.2cm・器高4.2cmに復元される。外面には段がなく天井部は時計回りの回転ヘラ削り、内面には不定方向のナデが観察される。11は口縁部から体部にかけての小片で、口径15.2cmに復元されるが小片のため不確実である。何れの個体も胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。12・13は土器器である。12は壺である。高壺の壺部か。口縁部から体部にかけての小片で、口径15cmに復元される。13は甕である。口縁部の小片で、残存高6.6cmを測る。わずかに残る胴部内面には左方向のヘラ削りが観察される。

②溝 (SD)

SD02 (Fig. 9)

調査区西部にて検出した。南北方向に延びる溝で、幅40~60cm、深さ20~30cmを測る。途切れながら延長15mにわたって続く。土層断面をFig. 10に示す。埋土は暗褐色砂の単層で、断面形は概ね逆台形を呈する。流水の痕跡は認められない。

出土遺物 (Fig. 11)

14は土器器小皿である。一部破片の欠損はあるがほぼ完形の個体である。口径9.2cm・器高1.2cm・底径7cmを測り、内底面には不定方向ナデ、外底面には回転糸切り痕および板状圧痕が観察される。15は白磁碗である。底部から体部にかけての小片で、内面に1条沈線を有し、外底面は露胎である。釉は透明感ない乳白色を呈する。

SD04 (Fig. 9)

調査区を途切れながら南北に貫く溝である。調査区北部で北東方向に向きを変え、調査区外に続く。南北方向の部分は前述SD02に概ね平行する。幅は南北方向部分で40~60cmとSD02とほぼ同じ、北東方向に延びる部分は広く、80cm~2m以上を測る。土層断面をFig. 10に示す。南北方向・北東方向何れの部分においても埋土は暗褐色砂の単層である。北東方向部分は黄褐色砂をブロック状に含むが概ね状況は変わらない。流水の痕跡は窺えない。断面形は南北方向部分が不整な逆台形で深さ30cm、北東方向部分が緩やかな皿状を呈し深さ20cmと幅の割に浅い。

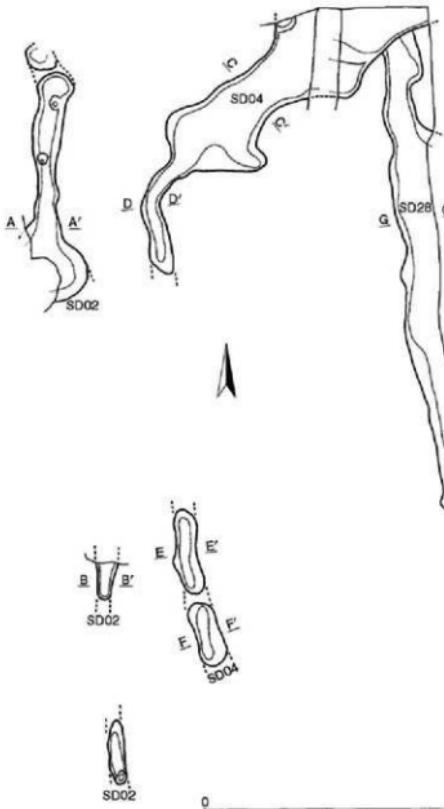


Fig. 9 SD02 - 04 - 28 実測図 (1/100)

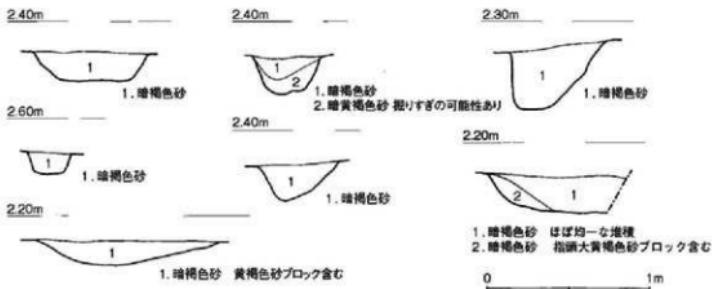


Fig. 10 SD02・04・28 土層断面実測図 (1/30)

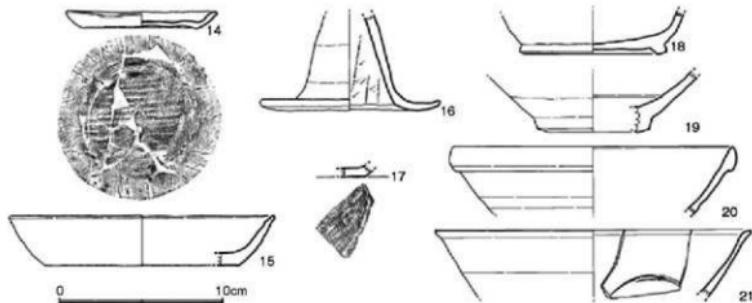


Fig. 11 SD02・04・28 出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (Fig. 11)

15は土器器底の小片である。口径16.2cm・器高3.1cm・底径11.8cmに復元されるが小片のため不確実である。全体に磨滅が顕著だが外底面に回転系切り痕が観察される。20・21は白磁碗である。いずれも口縁部から体部にかけての小片。20は不確実ながら口径17.2cmに復元され、残存高4cmを測る。口縁部に幅1.5cmの玉縁を有し、内面および外面上部まで透明感ない灰緑色の釉がかかる。内面には使用に伴う擦痕が多く観察される。21は外反する口縁を有する個体で、内面にヘラ書きによる文様がみられる。全面に透明感ない乳灰緑色の釉がかかる。明瞭な使用痕は観察されない。

SD28 (Fig. 9)

調査区東部にて検出した。南北方向に延びる溝で、SD04に切られ、SC29を切る。溝の東岸の大半が調査区外になるため不確実ながら幅40~60cmを測り前述の溝とほぼ同様とみられる。土層断面をFig. 10に示す。埋土は暗褐色砂を主体にし、西側から埋まつた可能性が指摘できる。他の溝と同様、流水の痕跡は窺えない。断面形は逆台形を呈し、深さ20~30cmを測る。

出土遺物 (Fig. 11)

16は土器器底の小片で、底径11cmに復元され、残存高5.9cmを測る。底部は外反し、内面はヘラケズリにて仕上げられる。17は土器器底である。底部の小片で、磨滅が顕著ながら外底面

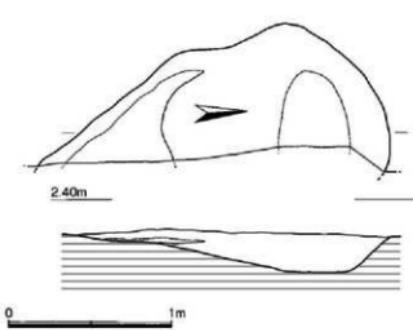


Fig. 12 SK37実測図 (1/30)

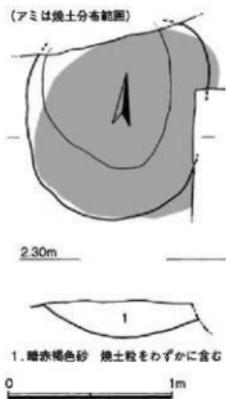


Fig. 13 SR24実測図 (1/20)

には回転糸切り痕および板状圧痕が観察される。18は須恵器高台付き壺である。底部から体部にかけての小片で、底径9cmに復元され、残存高2.6cmを測る。外底面にはヘラ切り痕が残り、断面台形の高台がナデにて貼り付けられる。内底面には不定方向のナデ・ハケ状の擦痕がみられる。

③土壤 (SK)

SK37 (Fig. 12)

調査区南東部にて検出した土壤である。大半の部分が調査区外に延びており全形は不明だが、大略長軸を北西—南東にもつ小判形の土壤となろうか。南部にテラスを有し北に向かって緩やかに深くなる。北端部が最も深く深さ25cmを測る。埋土は淡い褐色を呈する細砂の単層で底面との境界は漸移的である。

出土遺物 (Fig. 14)

22は弥生土器短頸壺である。口縁部から胴部にかけての小片で、残存高7cmを測り、口径14.6cmに復元される。精良な胎土を用いており、外面には丹塗り痕が明瞭に観察される。23は土師器小皿である。3/4個体残存する破片で、口径8.5cm・器高1.1cm・底径6.6cmを測る。外底面には回転糸切り痕および板状圧痕が観察され、内底面は不定方向ナデにて仕上げられる。24は龍泉窯系青磁碗である。底部及

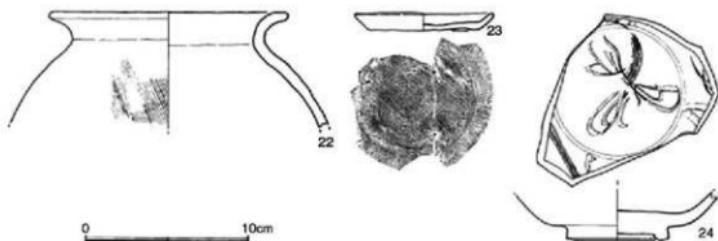


Fig. 14 SK37出土遺物実測図 (1/3)

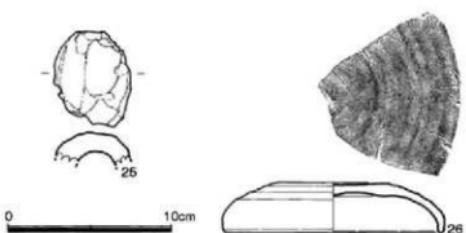


Fig. 15 ピット出土遺物実測図 (1/3)

軸を南北に有する梢円形の平面プランを有し、長径80cm以上・短径75cmを測る。土層断面をFig. 13に示す。埋土は、被熱して暗赤褐色を呈する砂で、焼土粒をわずかに含む。壁面との境界は不明瞭である。壁面の被熱した痕跡は観察されなかったため炉とする根拠は薄いが、本報告では暫定的に炉とし

び体部下半にかけての破片で、底径6.3cm・残存高3cmを測る。内面には片影りによる割花文を有する。軸は外底面を除く全面にかかり、透明感ある茶がかった灰緑色を呈する。何れの遺物も焼成は良好である。

④炉跡 (SR)

SR24 (Fig. 13)

調査区南部中央付近にて検出された。北部を搅乱に切られるが、長

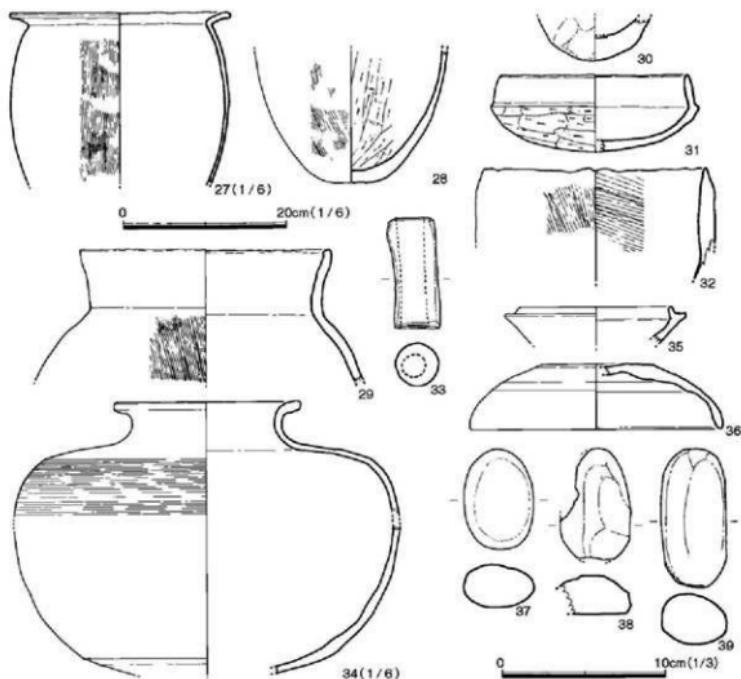


Fig. 16 遺構面掘り下げ時出土遺物実測図 (1/3)

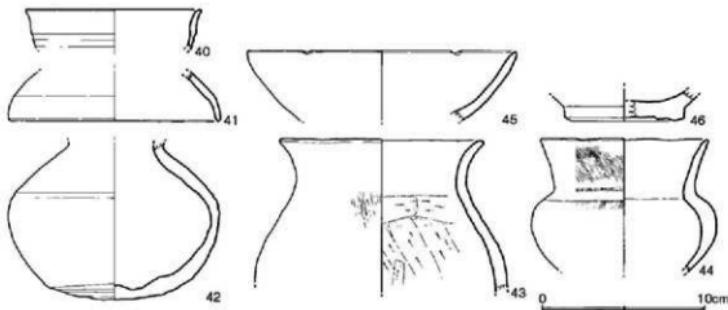


Fig. 17 遺構検出面出土遺物実測図 (1/3)

て報告するものである。遺物は出土しなかった。

⑤ピット

ピットは小穴を含め38基検出した。柱痕跡を検出し得たものはない。本報告では図化しうる遺物を2点図示するものである。

ピット出土の遺物 (Fig. 15)

25は輪羽口の小片である。SP35出土。外面は被熱が顕著で船状に溶解する。残存長5.7cmを測る。26は須恵器蓋である。約1/4個体残存する破片で、口径13.2cmに復元され、器高3cmを測る。天井部外面にヘラ記号を有する。

⑥遺構面掘り下げ時出土の遺物

遺構面に設定した暗黄褐色細砂層は弥生時代中期から古代までの遺物を含む包含層である。この層を掘り下げ、下層の黄白色砂層上にて再度遺構の確認を行ったが、その際に出土した遺物について主なものをFig. 16に図示する。

遺構面掘り下げ時出土遺物 (Fig. 16)

27は弥生土器甕である。底部を欠く小片で、口径27.6cmに復元され、残存高は21.2cmである。28は土師器甕である。底部から胴部にかけての小片で、器壁は厚く内面には上部に向けたヘラケズリが観察される。29は弥生土器甕である。口縁部から胴部にかけての小片で、口径15.4cmに復元される。胴部外面は一部被熱し橙色を呈し、口唇部は内面に向けわずかに肥厚する。30は丸底の手捏土器である。土師質で口縁部を欠損する。内面の器壁はほとんど剥落し不明だが、外面には指による成形の痕が観察される。31は土師器壺である。全体の約80%残存する個体で、須恵器の形態を模倣していると推測される。口径11.4cm・器高4.7cmを測る。外底面には不定方向のヘラケズリが観察される。焼成はやや不良で軟質のため器壁は磨滅するが、精良な胎土を用いている。32は土師器。おそらく碗または鉢形の土器となる。口縁部の小片で、口径13.6cmに復元される。33は土錘である。土師質でほぼ完形の個体。大略円筒形を呈し、棒状の原体に粘土を巻き付けて成形している。器長6.8cm・径2.7cmを測る。34は須恵器短頸甕である。底部を除き破片はあるが完全には接合せず、約1/5個体分の破片を復元的に図化している。口径11.4cmに復元される。全体に薄い作りで肩部にカキメを有する。35・36は須恵器である。35は底部を欠く壺の小片で、口径9.4cmに復元される。かえりが低く内傾する小型の壺で

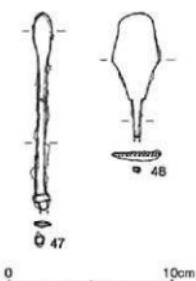


Fig. 18 鉄製品実測図 (1/3)

ある。36は蓋である。約1/3個体残存する破片で、口径15.6cmに復元され、器高4cmを測る。天井部外面はヘラによる切り離し痕が残る。37~39は使用痕ある円碟である。37は安山岩質の円碟を用いた磨石である。38・39は叩石である。38は欠損が目立つが安山岩質の円碟を用い、縁辺部に打痕を有する。39は花崗岩の小判形の円碟を用い、一方の端部に打痕を有する。

⑦遺構検出面出土およびその他の遺物 (Fig. 17)

40~42は須恵器である。40は壺である。口縁部の小片で、口径10.8cmに復元される。外面に2条の凹線を有し、器壁は薄く堅敏な作りである。41は蓋である。口縁部の小片で、口径13cmに復元される。何れも遺構検出面出土。42は排土中より採集したもので、ハソウないし有頸壺の胸部である。概ね2/3程度残存し、胴部径13cmを測る。肩部に沈線を有し、外底面は時計回りの回転ヘラケズリが観察される。胎の内部は赤褐色を呈する。43・44は土師器である。43は撲乱出土の小型の甌である。口縁部から胴部にかけての小片で、内外両面とも被熱による器壁の剥落が顕著である。口径は12.4cmに復元されるが、小片のため不確実である。44は検出面出土の小型丸底壺である。底部を欠く小片で、口径10.2cmに復元されるが、小片のため不確実である。頭部外面に丹塗り痕がわずかに認められる。45は龍泉窯系青磁碗である。口縁部の小片で、口唇部には輪花を有し口径16.4cmに復元される。46は白磁碗である。底部の小片で、内面にのみ施釉される。底径7.4cmに復元される。

⑧鉄製品 (Fig. 18)

何れも鐵である。47はSC01出土。闊まで残存する個体で残存長11.9cmを測る。48は遺構面掘り下げ時の出土。茎の端部を欠損する個体で残存長7.5cm、幅2.9cmを測る。何れも銹化が著しい。

3. 小結

今回の調査では、古墳時代後期末～古代にかけての堅穴住居、中世の溝・土塙を検出した。遺構は弥生時代中期から古代までの遺物を含む砂層に掘り込まれ、この層の下から遺構は検出されなかった。このことから調査地における土地の利用は古墳時代後期以降と推測される。住居址は電を有するものがあり、SC01は正置された土器が出土し住居址廃絶に伴う祭祀を行ったと推測される。出土した甌はいずれも口縁部を欠損しており、意図的に打ち欠いた可能性が指摘される。

検出された遺構で主体となるのは中世の溝および土塙である。時期は出土遺物から12世紀後半頃とみられ、砂丘南斜面で多く検出されている溝・井戸等と同様の時期である。とりわけ溝については規模も類似しており、既往の調査で存在が指摘されている屋敷地の区画溝と推測される。土塙も同様の時期とみられ、屋敷に関連する遺構となろう。現状での屋敷地の復元は難しく、調査例の増加を俟つて検討を加えたい。



1. 調査区西半北側（東より）



2. 調査区西半北側（東より）



3. 調査区西半掘り下げ後状況
(東より)

PL. 2



1. 調査区東半（北より）



2. 調査区東半掘り下げ後状況
(北より)



3. 調査区東壁土層（西より）

1. SC01 (東より)



2. SC01 窟土層 (東より)



3. SC01 窟内遺物出土状況
(東より)



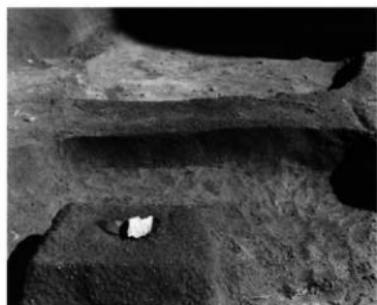
PL. 4



1. SC29 (北より)



2. SD02A-A' 土層 (南より)



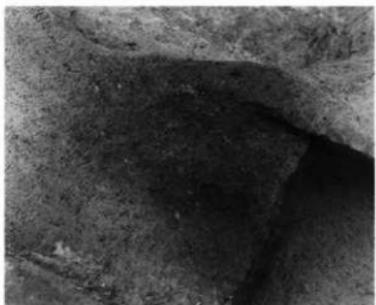
3. SD04C-C' 土層 (西より)



4. SD28G-G' 土層 (南より)



5. SK37 (東より)



6. SR24 (南より)

報告書抄録

ふりがな	ふじさきいせき				
書名	藤崎遺跡				
副書名	藤崎遺跡第36次調査報告				
卷次	-				
シリーズ名	-				
シリーズ番号	18				
編著者名	阿部 泰之				
編集機関	福岡市教育委員会				
所在地	福岡市中央区天神一丁目8番1号				
発行年月日	平成21年3月31日				
調査面積	187m ²				
調査原因	共同住宅建築				
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 (世界測地系)	東経 (世界測地系)	調査期間
ふじさきいせき 藤崎遺跡	ふくおかしわらく 福岡市早良区 ふじさき 藤崎1-3-37	40137 0307	33° 34' 47"	130° 20' 53"	2007.10.1~2007.10.29
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ふじさきいせき 藤崎遺跡	墓地 集落	弥生・古墳・中世	住居址・溝・ 炉跡・土壙	土師器・須恵器・ 陶磁器	12世紀後半頃の屋敷地
要約	<p>今回の調査では、古墳時代後期末～古代にかけての堅穴住居、中世の溝・土壙を検出した。住居址は竈を有するものがあり、SC01は正置された土器が出土し住居址廃絶に伴う祭祀を行ったと推測される。</p> <p>検出された遺構で主体となるのは中世の溝および土壙である。時期は出土遺物から12世紀後半頃とみられ、砂丘南斜面で多く検出されている溝・井戸等と同様の時期である。とりわけ溝については規模も類似しており、既往の調査で存在が指摘されている屋敷地の区画溝と推測される。</p>				

藤崎遺跡 18

－藤崎遺跡第36次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第977集

平成21年3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1

印刷 東洋印刷株式会社
福岡市早良区荒江2-4-6